

短大生の「実習」に関する一研究(1)

I. 保 育 実 習

奈良文化女子短期大学 幼児教育学科 山 田 郭 子
幼児教育学科 角 田 道 代
幼児教育学科 今 井 靖 親

目 的

「保育実習」は、保育士の資格を取得するための必修科目として養成校のカリキュラムの中に位置づけられている。保育実習の目的については、待井（2004）によれば、「指定保育士養成施設における保育実習の実施基準について」に、「保育実習は、その習得した教科全体の知識、技術を基礎とし、これらを総合的に実践する応用能力を養うため、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させることを目的とする」と記されている。また森上ら（2004）は、「実習は、学生が幼稚園や保育所などの保育施設で子どもと生活し、これまでの生活や学習で身につけた知識や技術を、保育者の援助を受けながら、保育の実際を経験する場と機会」であると述べている。このように、保育実習は、学生が養成校で習得した知識・技術を、保育の現場を借りて、実践的な能力にまで高めることを目的とした体験学習の場である。

1. 実習で学ぶこと

では、実習では、どのようなことを学ぶのであろうか。もう少し具体的に示してみたい。

(1) 養成校で学習した各教科の内容を実習場面で活用すること

学生は、養成校で、幼児の心身の発達や保育指導に関してさまざまな内容を学習するが、これらを実際の保育の中で確認することができる。たとえば、授業で学んだ幼児期の基本的な生活習慣の獲得について、子どもたちがこの習慣を大人たちと何度も繰り返されるかわりの中で身につけていく事実を体験的に理解する。

(2) 保育の内容や方法の実際を体験すること

たとえば、子ども同士のいざこざの場面で、どう対処したらよいかは、授業で講義を聴いたり、本を読んだりしただけでは、わかりにくい。ところが、そうした場面で、熟達した保育者が実際に子どもに接しているときの言動を見て、聞いて、感じて、望ましい対応のあり方を体得することができる。

(3) 子どもの生活や実態に即した保育活動をイメージすること

実習に参加する前は、肝心の子どもについてのイメージが乏しいために、保育活動の進め方や環境構成が考えにくい。実習で子どもと生活を共にすることで、子どもの興味や行動の特徴がつかめると、保育計画や保育方法が具体的に考えられるようになる。

(4) 保育者の職務内容や子どもへのかかわり方を理解すること

現場の保育士には、多種多様な果たすべき業務・職務・役割がある。これらは、たとえ授業などで詳細に説明しても十分にはわかりにくく、実際の保育の場で、保育者たちの行動を見たり、聞いたりすることで、はじめて具体的に理解できることが少なくない。また、実習園では、多くの人との出会いがあり、いろいろな人とかかわりが求められる。実習生は、園の子どもたち、保育者、保護者、その他さまざまな業務に携わる人々とかかわりをとおして、保育所とはどういうところか、何をするとところか、そこで何をしなければならないかなどについて学ぶのである。

2. 実習の教育的効果

実習は学生たちにどのような教育的効果をもたらすのだろうか。次にこの点について述べておきたい。

(1) 保育の実践に必要な知識や技能を獲得しようとする強い動機づけを与える

学生たちは、実習前に養成校で、保育にかかわるさまざまな教科を学ぶが、実践の場に立って初めてわかることも少なくない。また、一方では、実践する中で新たな課題に直面するが、このような時は、もう一度原理原則にもどると理解しやすくなる。実習後に保育の理論や保育指針の内容などが理解しやすくなっている自分を発見するとともに、実践に役立つ内容や方法をもっと学びたいという学生が確実に増加する。

(2) 年齢段階によって異なる幼児の発達の姿・園生活の実態・保育のあり方などへの興味・関心を広げる。

実習で子どもたちと生活を共にすると、それまで気づかなかった子どもの生活の実態、遊びの様子、食生活、家族の状況などに関心を向けるようになる。そして、素朴ではあるが、子どもたちがどう育っていくことが幸せか、保育者として何が必要かを考える。このように、保育実習の中でさまざまな出来事に出合うたびに新たな多様な疑問や興味が呼び覚まされる。

(3) 保育者になりたいという意欲を高める。

学生たちは、実習に行く前には多少とも期待と不安を抱いているが、いったん現場に参加し、保育者としての生活に慣れてくると、不安は消えていく。その代わり、新たな疑問や保育者としての力量への悩みを感じ始める。こうして保育に関する学習の内容の広さと深さを知っていくにつれて、保育の仕事は困難なことも多いが、自分にとってやりがいのある職種であり、そのために保育士の資格を取得すること、保育所へ就職することに向けて、新たな意欲を燃やすようになる。

(4) 保育者としての適性の有無を真剣に考える。

実習中に、早くも保育者になる意思を固め、就職試験に向けて準備を始める学生もいるが、逆に、自分が果たして保育者に適しているか、保育士として、責任ある仕事を確実にやっていけるかなどを、真剣に自問自答するようになる。このように、実習は自己の保育者としての適性を現実に即して真剣に考える絶好の機会になる。

(5) 実習体験全般への反省・評価をもとに、個々の学生においては、今後の学ぶべき課題を明確にし、養成校においても、実習指導上の改善すべきさまざまな課題を見出すことができる。

実習は、見学・観察実習から参加・責任実習へと進められていくが、この期間に学生が作成する実習記録は、保育の反省・評価の資料作成ではあるが、同時に記録作成自体が反省評価の重要なプロセスである。実習記録をもとに問題の所在、有効適切な取り組みを明らかにし、今後の実習課題を見出

すことは大切な実習内容である。園の保育計画、特に年・期間の指導計画、月案・週案・日案や幼児の実態などをもとに、保育の流れに沿って、子どもの反応、実習生や保育者の働きかけ、環境構成など、保育の一コマ一コマをフィードバックさせて、そこに影響している要因や原因を分析的に捉え、そのうえで反省すべき点、評価すべき点を明らかにしてかなければならない。もちろん指導担当の保育者による日々の指導助言、実習終了後の反省会などから直接的・間接的に学ぶことが、実習生にとっては実に貴重な財産となる。

一方、実習生の指導を保育現場に委託した養成校においても、個々の学生の実習記録や実習後の報告・反省会をはじめ、アンケート調査などをおして実習の実態や状況をしっかりと把握しなければならない。それをもとにした反省・評価から、学生に対する具体的な指導や実習に関するさまざまな課題を明らかにし、改善すべき点へのすばやい適切な取り組みに生かしていくことが必要である。このような観点から、実習は単に学生たちにとって大きな教育的効果をもたらすだけではなく、養成校にとっても、日ごろの養成のあり方や内容・方法に関して反省・評価をおこなう貴重な機会であると私たちは考える。

そこで、本研究は、実習参加の前・後に学生を対象としたアンケート調査を行い、その結果の分析をおして、実習指導におけるさまざまな問題点や課題を見出し、その改善に向けてどのように対処していくべきかについて、具体的な示唆を得ることを目的としておこなった。

方 法

本学幼児教育学科2回生を対象として、保育実習に参加する前と終了後に、以下に示すような内容のアンケート調査を行い、それぞれの資料を関連づけて分析した。

事前調査：1. 実習を前にして、「楽しい（嬉しい）だろうな」と期待していること（9項目より5選択）

2. 実習で「学びたい（知りたい）」と希望していること（12項目より5選択）

3. 実習に際して、「心がけ、実行しよう」と思っていること（8項目より4選択）

4. 実習を前にして、「不安に思う（気がかりな）」こと（11項目より5選択）

事後調査：1. 実習で「楽しかった（よかった）」こと（9項目より選択制限なし+「その他」自由記述）

2. 実習で「学べた」こと（12項目より6選択+「その他」自由記述）

3. 実習で「心がけ、実行できた」こと（8項目より選択制限なし）

4. 実習での「つらかった（できなかった、嫌だった、悲しかった）」こと（11項目より選択制限なし+「その他」自由記述）

調査対象人数：事前調査 66人 事後調査 70人

結 果 と 考 察

1-A：実習を前にして「楽しい（嬉しい）だろうな」と期待していること

実習の楽しさとして一般的に予想される項目を9項目用意し、そこから5項目を選択させる、という

回答方式を採用した。実習前の段階では、問われても具体的なイメージがつかめず、実際に経験して初めて回答できることでもあるので、事前調査では、まずは全体の傾向を把握するためにこのような回答方式を採用し、事後調査においては、選択制限を設定しない回答方式を採用した。したがって、今回の調査結果における数値の解釈という点では、事前と事後での直接の比較にもとづくものではないことを予めおことわりしておきたい。

まず、表1を見ると、楽しさへの期待は、子どもとの自由遊びが97%と圧倒的に多く、以下、園外保育（77%）、子どもの発達や年齢に応じた保育のあり方を具体的に指導してもらえることへの期待（76%）、園内でのいろいろな行事への参加（74%）が高い数値を示している。さらに子どもと一緒に給食やおやつ（61%）などが続き、これらが上位の5つを占めている。これに対して、自分が担当する保育を楽しみにしている者は、全体の24%と少なかった。自分自身が担当する保育を考えると、楽しい期待よりは、不安や自信の無さのほうが先に立つのであろう。

表1 実習における「楽しい（嬉しい）こと」への期待

番号	項目	実数	%
①	子どもたちとの自由遊び	64	97
②	自分が担当する保育（歌・リズム遊び・製作・お話など）	16	24
③	子どもと一緒に給食（給食）・おやつ	40	61
④	園外保育（遠足・散歩など）への参加	51	77
⑤	いろいろな行事（誕生会・七夕祭り・運動会・クリスマス・もちつき・地域の祭りなど）への参加	49	74
⑥	子どもの発達や年齢に応じた保育のあり方を具体的に指導していただけること	50	76
⑦	先生方や職員の方と人間的な心のふれあいができること	26	39
⑧	保護者や地域の人たちとふれあう機会があること	8	12
⑨	「通勤」という形で「出勤」し、保育の現場の生活が学べること	26	39

実習先での先生方や職員の方との人間的なふれあいに期待を寄せている者が40%近くいる点にも注目したい。しかし、子どもの保護者や地域の人々とのふれあいについては、実習前の段階では、そこまで思いをめぐらせないのが実情なのだろう。

1-B：実習で楽しかった（よかった）こと

表2 実習における「楽しかった（嬉しかった）こと」

番号	項目	実数	%
①	子どもたちとの自由遊び	64	91
②	自分が担当する保育（歌・リズム遊び・製作・お話など）	30	43
③	子どもと一緒に給食（給食）・おやつ	53	76
④	園外保育（遠足・散歩など）への参加	43	61
⑤	いろいろな行事（誕生会・七夕祭り・運動会・クリスマス・もちつき・地域の祭りなど）への参加	22	31
⑥	子どもの発達や年齢に応じた保育のあり方を具体的に指導してもらえたこと	39	56
⑦	先生方や職員の方と人間的な心のふれあいができたこと	33	47
⑧	保護者や地域の人たちとふれあう機会があったこと	20	28
⑨	「通勤」という形で「出勤」し、保育の現場の生活が学べたこと	35	50

実習前の期待どおりに、楽しかったことの最高は、子どもたちとの自由遊びであった(91%)。以下、子どもと一緒に給食やおやつ(76%)、園外保育などへの参加(61%)と続くが、いろいろな行事への参加は、事前の期待度が高かった割には、31%と低かった。この点に関しては、次のように考える。

園内でのいろいろな行事は、保育者にとっては、事前の計画や準備はもちろん、当日も安全性への配慮や実施面でも多大の労力が求められる責任の重い保育の一部なのであり、単純に『楽しい』だけのものでは決してない。学生たちは実際の保育体験をとおしてこのことを理解し、その結果として、実習後のアンケートでは、「楽しかった」という単純な受けとめ方が減ったのではなかろうか。

次に、約40%の者が自分の担当した保育が楽しかったと答えている。実習前では不安や自信の無さが先に立って、楽しいこととして大きな期待はかけられなかったが、実際に自分が経験することで、保育の楽しさを実感できたことを示していると思われる。自由記述の「その他」の項目に、嬉しかったこととして、「子どもたちのほうからも話しかけてくれたり、抱きついてきてくれたりしたこと」、「かかわりが少なかった年長・年中の子ども数人が私の名前を覚えてくれたこと」が書かれていた(4人の中の2人)。

「子どもの発達や年齢に応じた保育のあり方を具体的に指導してもらえたこと」を挙げた者は56%であった。実習前の期待度と比較すると、やや数値が低いですが、むしろ、この点に関しては、全体の約6割の者が満足できた、と受けとめてよいのではないかと考えられる。

先生方や職員との人間的なふれあいとともに、保護者や地域の人たちとのふれあいについても楽しさを実感できた者が多かった点に注目したい。保育の仕事に携わる楽しさや喜びは、子どもたち・保育者・その他の職員・保護者・地域の人々との温かい人間関係や心のふれあいにその大きな源があると言えるであろう。

「通勤という形で出勤し、保育の現場の生活が学べた」を「楽しかった」ことに挙げた者が約半数を占め、実習前よりも増えている。確かに身分は学生ではあるが、実習は学生の「通学」とは異なり、「出勤簿」に捺印し、自分自身の責任ある行動を求められる現場である。そこで、未熟ではあるが、学生たちは「保育者」として、それなりに責任ある役割を果たす日々には充実感と満足感が得られたにちがいない。実習におけるこのような経験こそ、学生たちに社会人としての自覚と心の成長を強く促すのだと思う。

2-A: 実習で学びたいこと

表3には、学生が実習をとおして学ぶべき主要なことがら①から⑫まで列挙されているが、実習に参加する前の段階で、学生たちが一番強く望んだのは項目⑨で、全体の約8割を占めていた。

この結果は、実習を前にして、まず子どもたちが実際にどのような園生活を送っているかを知り、そのうえで具体的な保育のあり方を学びたいという希望を持っている事実を示している。これには観察実習などを含めて、事前指導において、この点に関する適切な対応が必要である。

次に多かったのは、項目⑦と⑪であった。確かに大学では、授業をとおして、保育形態・保育内容・保育方法などについて学んではいるが、それらはかなり抽象的な知識に属するものであり、現実の子どもたちの姿との結びつきは薄い。実習において大学で学んだ知識・理論を、子どもたちが一日の園生活の流れと関連づけてこそ、保育の実際が理解できるのであり、それを学ぶことがまさに実習の意義であると言えよう。

さらに、実習を前にした多くの学生は、子どもたちの園生活の実際・年齢や心身の発達の特徴・それぞれの発達課題に即した保育のあり方を知りたい、学びたいと思っていることが明らかになった。保育所には0歳から6歳までの乳幼児が在園し、年齢幅も発達差も大きい。そうした要素に基づいた保育の必要性を感じ取ったうえでの回答と考えてよいだろう。その他では、項目①・③・⑧・⑫などが全体の40%前後を占めて比較的多いが、項目②・④・⑤・は30%前後でやや少なく、項目⑥と⑩が20%前後で最も少なかった。

表3 実習で学びたいと希望していること

番号	項目	実数	%
①	幼稚園・保育所とはどのようなところか、何をするとところかなど、体験を通して理解すること	31	47
②	保育士や幼稚園教諭という資格にふさわしいことを学ぶために「実習」という体験が必要なのだ と、自分自身で納得・理解すること	21	32
③	幼稚園と保育所との同じ点・似ている点・違う点について、実際の体験からよくわかること	28	42
④	実習先の幼稚園・保育所の独自性や特色（保育方針・保育内容など）や、公立と私立との違い を具体的に知ること	18	27
⑤	園により、その規模や地域の特色には、大きな違いがあることを、実際の体験から知ること	19	29
⑥	園にいる専任の園長・教諭・保育士・看護師・栄養士・調理員・事務職員・用務員などの仕事内 容や人間関係などについて知ること	12	18
⑦	子どもたちが登園してから降園するまでの園生活の流れが、実際の保育の形態・内容・方法な どと関連づけて理解できること	39	59
⑧	実習日誌を書く必要性や大切さがわかり、また、その書き方についても具体的な指導をしてもらえること	29	44
⑨	乳幼児の園生活の実際がわかり自分がその中でどのように保育に関わったらよいかを学ぶこと	52	79
⑩	保育指導計画（指導案）を実際を書くことで、その必要性や書き方が学べること	16	24
⑪	子どもたちの年齢や心身の発達の特性と、一人ひとりの発達課題に即した指導のあり方を学ぶこと	39	59
⑫	保育中の事故・けが・突然の災害などの緊急事態に、自分がどのように対処したらよいかを学ぶこと	25	38

2-B：実習で学んだこと

表4で、まず顕著なのは項目②の数値が大幅に上昇し、項目中第一位を占めたことである。これは、学生たちが、保育士の資格を取得するために、実習というものが大切であることを実感できたことを示している。つまり、保育実習の意義と必要性への認識を確実に深めた証拠であり、大学で彼らの実習指導を担当している教師としては、大変に喜ばしいこととして受けとめたい。

項目⑪と⑦も相対的に上昇が著しい。経験をとおして子どもたちの年齢や発達の姿を理解し、日々の生活の流れにふれてみて、保育の内容や方法への理解も深まり、実際の指導のあり方についても学ぶことができた、という実感が持てたのだと思う。項目⑤と⑥についても、実習前よりもかなり数値が増加している。園の特色とか、園の構成人員の役割や人間関係などは、実際に現場で経験して、初めて具体的な理解ができたのだと思う。項目⑨だけは数値が大幅に下がっているが、この項目の内容は、項目⑦との類似性が高い。実習前の学生には、この表現のほうの方がわかりやすかったのでこれを選ぶ者が多かったが、実習後では、より具体的な表現の項目⑦のほうを選ぶ者が増えたのではないかと思われる。

「その他」の項目の自由記述の欄には、「命の尊さを学ぶことができた」、「教材えらび、教材の生かし方、場面場面での対応の仕方を学んだ」の2つが挙げられていた。

表 4 実習で学んだこと

番号	項 目	実数	%
①	幼稚園・保育所とはどのようなところか、何をするとところかなど、体験を通してよく理解できた	30	43
②	保育士や幼稚園教諭という資格にふさわしいことを学ぶために「実習」という体験が必要なのだと納得できた	54	77
③	幼稚園と保育所との同じ点・似ている点・違う点について、実際の体験から理解できた	21	30
④	実習先の幼稚園・保育所の独自性や特色（保育方針・保育内容など）や、公立と私立との違いを具体的に知る事ができた	14	20
⑤	園によりその規模や地域の特色には大きな違いがあることを実際の体験から知ることができた	36	51
⑥	園にいる専任の園長・教諭・保育士・看護師・栄養士・調理員・事務職員・用務員などの仕事内容や人間関係などについて理解できた	21	51
⑦	子どもたちが登園してから降園するまでの園生活の流れが、実際の保育の形態・内容・方法などと関連づけて理解できた	51	73
⑧	実習日誌を書く必要性や大切さがわかり、また、その書き方についても具体的に学ぶことができた	29	41
⑨	乳幼児の園生活の実際がわかり、自分がその中でどのように保育に関わったらよいかを学ぶことができた	41	59
⑩	保育指導計画（指導案）を実際を書くことで、その必要性や書き方を学ぶことができた	22	31
⑪	子どもたちの年齢や心身の発達の特性と、一人ひとりの発達課題に即した指導のあり方を学ぶことができた	53	76
⑫	保育中の事故・けが・突然の災害などの緊急事態に、自分がどのように対処したらよいかを学ぶことができた	20	29

3-A 実習に際して、「心がけ、実行しよう」と思っていること

表 5 実習に際して「心がけ、実行しよう」と思っていること

番号	項 目	実数	%
①	出勤・会合・保育などの時間に遅れない	25	38
②	実習中は、自分の服装や髪・持ち物などに十分注意する	16	24
③	しっかりとあいさつをし、言葉づかいに注意する	60	86
④	体調を崩すと、いろいろな人に迷惑をかけるので、健康管理には十分に気をつける	44	67
⑤	出勤簿に印を押す、実習日誌・保育指導計画・課題などを提出するなどの決まりはしっかり守る	18	27
⑥	無断で遅刻したり、休んだりしない	15	15
⑦	積極的な態度で実習に参加し、担当の先生から指導を受ける	33	50
⑧	笑顔や明るさを保ち、意欲的な態度で子どもたちや先生方とのふれあいを豊かにする	53	76

3-B 実習で「心がけ、実行できた」こと

表5の数値は、8項目から5つを選択させた結果である。上位5つを列挙すると、項目③、項目⑧、項目④、項目⑦、項目①の順であった。これに対して表6は、選択制限なしに回答させた結果である。

前述した理由で、両者の単純な比較は避けるが、表6は、実習を終了した時点で、学生たちがこれらの項目について努力し、強い達成感を持たせたことを示唆している。これはあくまでも実習生の自己評価の結果であり、実際に指導を担当してくださった先生方の評価とは、かなりの差があるだろうが、大学側の指導担当者としては、これだけの結果を残した学生たちの「実行」あるいは「努力」に対しては、それなりの評価をしてやりたいと思う。ただし、健康管理の面や積極的な態度での実習参加に関しては反省すべき点があったことが伺える。このことについては、面接や反省会などをおして、詳細を明らかにしていく指導が必要である。

表 6 実習で「心がけ、実行できた」こと

番号	項 目	実数	%
①	出勤・会合・保育などの時間に遅れない	65	93
②	実習中は、自分の服装や髪・持ち物などに十分注意する	63	90
③	しっかりとあいさつをし、言葉づかいに注意する	57	81
④	体調を崩すと、いろいろな人に迷惑をかけるので、健康管理には十分に気をつける	44	63
⑤	出勤簿に印を押す、実習日誌・保育指導計画・課題などを提出するなどの決まりはしっかり守る	60	86
⑥	無断で遅刻したり、休んだりしない	69	99
⑦	積極的な態度で実習に参加し、担当の先生から指導を受ける	45	64
⑧	笑顔や明るさを保ち、意欲的な態度で子どもたちや先生方とのふれあいを豊かにする	56	80

4-A 実習を前にして、「不安に思う（気がかりな）」こと

表 7 実習を前にして「不安に思う（気がかりな）」こと

番号	項 目	実数	%
①	遅刻しないように毎朝早く起床し、しっかり朝食をとって実習にいけるだろうか	8	12
②	毎日、朝早くから実習園に行き、時には、夜遅く帰るような生活が続くと、疲れがたまって動けなくなるだろうか	27	41
③	緊張や疲労が重なって体調を崩し、大事な実習を休んでしまうのではないかと	27	41
④	実習生として、毎日、元気に明るくふるまえるか、身体表現など積極的にできるか	40	61
⑤	園の子どもたちから自分が受け入れてもらえるか	46	70
⑥	園の先生方やその他の職員の方々から自分がどのように見られるだろうか	43	65
⑦	子どもたちの年齢や心身の発達に応じて、どの子にも適切に対応できるだろうか	39	59
⑧	ピアノを実際の保育の場面でうまく弾けるだろうか	34	52
⑨	経験が無い自分が、週案や日案などの保育の指導計画案をきちんと作成できるだろうか	37	56
⑩	毎日提出する「保育記録」がきちんと書けるだろうか	16	24
⑪	保育記録その他の提出物を決められた期限内にきちんと書いて出せるだろうか	13	20

4-B 実習での「つらかった（できなかった・嫌だった・悲しかった）」こと

表 8 実習での「つらかった（できなかった・嫌だった・悲しかった）」こと

番号	項 目	実数	%
①	遅刻しないように毎朝早く起床し、しっかり朝食をとって実習に行けない日があったこと	7	10
②	毎日、朝早くから実習園に行き、時には、夜遅く帰るような生活が続き、疲労がたまってしまったこと	29	41
③	緊張や疲労が重なって体調を崩し、大事な実習を休んでしまったこと	5	7
④	実習中、元気に明るくふるまえなかったり、身体表現など積極的にできない時があったこと	17	24
⑤	子どもたちから、自分が受け入れてもらえない感じがあったこと	4	6
⑥	先生方やその他の職員の方々と、どこか、なじめない感じがあったこと	20	29
⑦	子どもたちの年齢・体・心の発達に応じた、適切な対応ができなかったこと	23	33
⑧	実際の保育の場面でピアノをうまく弾けなかったこと	21	30
⑨	経験がないために、週案や日案などの保育の指導計画案をきちんと作成できなかったこと	20	29
⑩	毎日提出する「保育記録」がきちんと書けなかったこと	6	9
⑪	保育記録その他の提出物を決められた期限内にきちんと書いて出せなかったこと	9	13

表7は11項目の中から5つを選択させた結果である。項目⑤が最も数値が高く、次に項目⑥が高かった。これらは、実習前の不安や心配が園における人間関係に集中していることを示している。さらに項目④、項目⑦、項目⑨、項目⑧がわずかな差でこれに続いている。これらは、項目⑧のピアノが弾けるかどうかの不安に象徴されるように、未経験な自分が、実際の保育にどんな態度・技能・心構えで臨んだらよいか分からないことからくる、戸惑いや自信の無さが表明されているように思う。その他、実習中の心身の緊張や疲労、保育記録を書くことへの心配が表明されている。

これに対して、表8からわかるように、実習を終わった時点では、項目①と②以外は、すべての項目で数値が大幅に低くなっている。一見して、実習前の不安・心配・気がかりなことは、杞憂に過ぎなかったかのようである。これを、一応は、実際に保育の場に臨んでみたら、思った以上に、事前の不安は解消された、あるいは心配したほどではなかったという結果を示している、と受けとめてよいと思う。しかし、そういう視点だけではなく、次のような考察も必要であろう。

確かに、自分が子どもたちから受け入れられなかったらどうしようというような心配は、ほとんど杞憂に過ぎなかったようである。また、緊張や疲労が重なって体調を崩し、実習を休んでしまった者も僅か5人だった。「保育記録」が書けなかった者も一割にも満たない。これと関連して、「保育記録」その他の提出物を期日までに書いて出せなかった者が9人いた。さらに、実習に遅れないように、朝食も摂らずに行った者も一割ほどいた。しかし、学生が70人もいれば、この程度の人数に「問題」があったとしても驚けない。もちろん、たとえ小数ではあっても、これらの学生一人ひとりにきめ細かい指導をおこなうことも必要である。ただ、それ以上に、表⑧のデータは、項目②、項目④、項目⑥、⑦、⑧、⑨において、回答を寄せた全体の2割以上から3割以上の者への、実習後の適切な学級指導、個人指導が必要であることを示している。なお、この項目におけるアンケートでは、「その他」の自由記述が多く、全体で31の回答が寄せられていた。その大部分は表8の調査項目に含みうる内容に思えるが、参考までに、以下に主なものを内容別にまとめて例示する。

(1) 疲労や体調不良に関して：

「休まなかったが、体調を崩してしまった」、「休憩時間が無く、体調を崩して声が出なくなった」など。

(2) 保育のあり方に関して：

「緊張して、うまく自分の保育指導ができなかった」、「何をしたらよいかわからなかった」、「実習は見学じゃないのよと言われた」、「あなたがしていることは、参加実習と変わりありませんと言われた」、「指導の先生にほめられることがなく、何がよくて、何が悪いのかわからなかった」など。

(3) 子どもへの対応に関して：

「子供同士の遊具や道具の貸し借りへの対応がむずかしかった」、「休んでいた子が、始めは自分と関わってくれなかった」、「設定保育の時に、後ろのほうで座り込んでいる子がいて、どうしてよいか困った」、「自分勝手に行動する子に、何度も注意しても聞いてくれなかった」など。

(4) 保育技術に関して：

「ゲームがうまくできなかった」、「緊張してピアノを弾くとき失敗した」、「絵本をじょうずに読めなかった」、「子どもへのことばかけが少なかった」、「変に気を使いすぎて、先生に聞きたいこと、疑問に思ったことなど尋ねられなかった」など。

(5) 保育日誌に関して

「保育日誌を書くのが大変だった」、「大学で習った書き方と違っていて、とまどった」など。

私たちは、実習に関わるさまざまな問題に当面している学生たちに、従来からも、実習後に実習ノートやクラスでの反省会、さらに個人面談などの機会を積極的にとらえて指導をおこなってきているが、今回のアンケートによる調査結果は、実習後のきめ細かい指導の必要性をいっそう明確に示してくれる貴重な資料となったことを強調したい。

今後の課題

今回は、保育実習に参加する前の時点で、①学生たちの実習の楽しさへ寄せる期待、②実習で学ぶことへの希望、③実習で実行を心がけていること、④実習に際しての不安・心配についてアンケート調査を実施し、さらに、実習後に、①実習での楽しかったこと、②実習で学んだこと、③実習で実行できたこと、④実習でつらかったこと、についても同様のアンケート調査を実施した。その結果、上述したように、得られたデータについて分析と考察をおこなった。

今後は、幼稚園実習についても、同様の調査をおこない、保育実習の結果と比較し、両者の類似点や特殊性について比較検討をおこなうことを予定している。さらに、そうして見出された実習に関する多くの問題点や解決すべき課題について、特に実習の実態・実情を把握し、それにもとづいたよりよい指導のあり方をぜひ探っていきたいと考えている。

引用文献

- 「保育実習・教育実習」現代の保育学6 待井和江・福岡貞子編 2004 ミネルヴァ書房
「幼稚園実習 保育所実習・施設実習」新・保育講座12 森上史朗・大豆生田啓友編 2004 ミネルヴァ書房